

旧会館時代の思い出

梶谷 剛(第一東京)

日弁連は、設立後7年余り、一弁や東弁の会館を点々と間借りしていたが、1957年1月、刑務協会会館を購入した。その経緯は当時の吉井勇事務総長が書かれている(法曹百年史)。それによると、1956年9月に会館建設委員会が発足し、翌年1月には5千数百万円(現在に換算すると、給与所得比較20倍として10億円以上)の予算と各種契約等の計画大綱を臨時総会で承認され、同年早々に移転した。その間、東京は勿論、各地の弁護士自治の本拠に対する熱意の盛り上がりは高く、臨時総会以前の56年12月時点で寄付金が1,650万円にも達したとのことである。このように、旧会館は弁護士の自治と独立を象徴し活動の本拠とするという先達の熱い志の賜物である。

独立して並んで建つ東京三会の会館から100mほど離れていることもあり、弁護士の奥の院の印象であった。すでに相当古く貫禄のあった鉄筋コンクリート造3階建、建坪184坪(総面積550坪)の建物で、最上部正面に弁護士記章が表示されていた。玄関を入ると右正面に広い階段があり、昇り切った2階正面に総・次長室、左に副会長室、奥に会長室があり、会長室の手前左前方に来賓室兼会議室があった。1階は事務局と扶助協会等の外郭団体、3階は講堂・会議室であった。狭いながら天井が高かったことを覚えている。

私が日弁連会務に本格的に参加したのは、1985年に日弁連常務理事(一弁副会長兼務)に就任し、折から勃発した外国弁護士問題に対応するための理事会内小委員会の副委員長として日弁連意見の原案作成、法務省との窓口等の役割を担った時からである。外弁問題は会内を二分する大激論の中でガラス細工と評される厳しい調和の中で合意にこぎつけたもので、毎日のように竹内桃太郎担当副会長(一弁会長)、釘沢一郎事務総長と打合せを行いつつ、法務省司法法制調査部を訪れ、井嶋一友部長、但木敬一参事官等と交渉したことは忘れがたい。但木参事官が後に出版した「司法改革の時代」の中で、カラスの鳴かない日はあっても梶谷さんの声を聞かない日はないと述べているくらいである。

釘沢総長は、謹厳・剛毅だが、酒好きで、午後6時を過ぎ、議論が尽きないと会長秘書の泉幸子さんが、お燗やつまみ、時には七輪で目刺しを焼いて出してく

れ、他の委員や当時から総・次長室にいた福島進さん等も加わって、酒を飲み交わすこともしばしばだった。今では考えられない良き時代であった。

1990年1月から2年間、私は事務次長に就任した。3月末までは藤井英男会長、大石隆久事務総長、4月から中坊公平会長、井田恵子事務総長であった。日弁連を担う首脳の方の異なった個性に間近に接しつつ執務したことは得難い経験であった。中坊会長の強烈な個性と執念に基づく会内外での活動、井田総長の初代女性総長としての矜持と責任感等、新しい時代を迎えるに相応しい緊張感に溢れたスリリングな毎日であった。

当時、事務次長は2名で、就任前半は尾崎昭夫次長、後半は葉山水樹次長と組んだ。2名しかいないので1年毎にほぼすべての委員会を担当することになり、大変勉強になった。

総・次長室は、決して広くはないが、入り口右奥に総長、左に次長が並び、入り口直近に職員2名(福島進さん、湯浅公子さん・後半は森田有美さん)の机があり、中央に応接椅子がある。簡素ながら、常時内輪の会議や頻繁な来客との接遇等、日弁連事務の中心であった。井田総長は、常に花を飾って柔らかな雰囲気漂わせるよう気を配っておられた。副会長室は総・次長室より狭く、12名の副会長が執務を常時行うには適しているとはとても言えない状況であった。また、正副会長会議は会議用机があるのみで、正副会長、総次長、および説明者が座ると極めて窮屈で、私など次長は、机の角に座るような状態であった。「膝を突き合わせる」という言葉があるが、このように狭い所は腹藏なく話せる舞台として有用だったのかもしれない。

日弁連・東京三会同新会館は昭和40(1965)年代から計画され、面積割合をはじめ多くの困難を乗り切って1995年に竣工された。今、17階建の威容を誇っている。私はその後、副会長、会長を経験したが、新会館の快適さを強く感じたものである。

古くて狭く使い勝手が悪かった旧会館ではあったが、私は、そこで過ごした弁護士会生活の青春ともいふべき時期の会館の雰囲気とともに、一緒に活動した多くの先輩、同僚、職員の方たちを、感謝をもって懐かしく思い出すのである。